

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 8 月 7 日現在

機関番号：32511

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26671044

研究課題名(和文)多職種連携や当事者参加による非言語情報媒体を活用した在宅生活ニーズの把握方法

研究課題名(英文)Utilization of a nonverbal medium to understand home living needs through multidisciplinary cooperation and participation by the individuals concerned

研究代表者

工藤 恵子(Kudo, Keiko)

帝京平成大学・ヒューマンケア学部・教授

研究者番号：60453958

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、在宅生活ニーズを把握する際に非言語情報媒体の一種である住宅見取り図を用いて、見取り図の効果的な活用方法を検討することを目的とした。見取り図の活用実態調査や活用の試行を経て、活用効果検証のために仮想事例検討会を実施した。見取り図は、特に住環境に関連する情報共有を短時間で具体的に行うことにおいて有効であった。さらに、そこで生活する人々に対する想像力を喚起させ、これらは支援策の広がりにもつながる可能性が示唆された。見取り図の備えるべき要件や具体的な活用場面の検討は今後の課題である。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to determine how to effectively utilize floor plan sketches (FPSs) to understand home living needs. Following a survey on the utilization of FPSs and a trial of their use, a conference of hypothetical cases was conducted to examine the effect of utilizing FPSs. FPSs were effective in enabling specific information to be shared in a short time, particularly information on the living environment. Moreover, their use stimulated imaginative thinking in those who lived in the home. These findings suggest that FPS utilization may lead to a broadening of support measures.

研究分野：公衆衛生看護学

キーワード：見取り図 多職種連携 在宅生活 住環境

## 1. 研究開始当初の背景

近年、医療の高度化・多様化に伴い、保健、医療、福祉の専門職は国家資格をはじめとする有資格者や職種が増加している。さらにケアの場は、医療機関等の施設中心から在宅を含めた生活の場へと移行しつつある。このような状況において、保健、医療、福祉いずれの分野でも多職種間連携が重要であることが強調されている。「保健所機能を活かした保健・医療（看護）・福祉の連携強化」報告書（2010）では、保健所を中心とした地域のネットワーク構築には、関係機関、関係者が、それぞれの役割を認識した上で、課題を明確化し共有化が図られることが大切であるとしている。さらに地域のネットワークが構築される連携強化の過程では、個々の事例の課題を発見、共有し、ケアを提供することがベースになることも報告されている。ケアの場が在宅中心に移行している現在、「住まい」にある課題を把握し、多職種が連携して支援策を検討し、課題解決をする必要がある。しかし様々な専門職の連携は、それぞれの所属やバックグラウンドが異なることから、時に行き違いや誤解を生じることもあり、保健、医療、福祉の分野では常に検討課題となっている。

## 2. 研究の目的

本研究は、非言語情報媒体の一種である見取り図を活用し、多職種連携あるいは当事者参加によって行われる在宅支援のアセスメントの実態把握あるいは試行をとおして、その効果を明らかにしながら、在宅支援者の見取り図活用による在宅ニーズの把握方法を検討しようとするものである。

近年、日本では高齢者人口、とくに医療・介護費用の需要に直結する75歳以上人口の増加を見越し、地域包括ケアの構築が急がれている。とくに最近の議論においては、「住まい」あるいは「住まい方」にも関心が向けられている。「地域包括ケアシステムにおける『5つの構成要素』」では、地域のさまざまなサービスが入る生活ベースとして「住まいと住まい方」あるいは「本人・家族の選択と心構え」が位置づけられており、「生活の基盤として必要な住まいが整備され、そのなかで高齢者本人の希望にかなった住まい方が確保されていること」が、システム成立の前提条件とされている。

まずは、住まいと住まい方に関する個々の評価が、在宅支援者によってなされることが求められているのではないかと。住まいは病院など施設とは異なり、本人が感じ取っているニーズに合わせて主体的に生活できる場であるが、本人が諦めているあるいは気づいていないニーズも潜在しているものと推察される。その点については、多分野の専門職による視点を含めて検討がなされ、対応策が選択される必要があるだろう。そのために、「住まい方」を含めた住生活のニーズアセスメント

が多職種の支援者によつて的確になされることが求められる。本研究はその方法論として、非言語情報媒体、とくに見取り図の活用に関する効果および課題を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究では5つの調査を実施した。〈調査1〉は、すでに見取り図を活用している在宅支援者を対象としたインタビューによる調査である。〈調査2〉は介護支援専門員を、〈調査3〉は介護予防教室参加の当事者を対象とした見取り図活用の試行調査となっている。〈調査4〉は、在宅支援者（介護支援専門員）の研修における見取り図の活用実態を把握するための質問紙調査である。〈調査5〉は、事例検討会における見取り図活用の効果を客観的に示すため、仮想事例を用いた実験的方法による調査である。

## 4. 研究成果

〈調査1〉在宅高齢者療養支援における見取り図活用の効果

見取り図の活用目的は、専門職が所属する機関や機能によってその視点は異なるものの、療養者の安全や安心を図るための情報共有を効率化し、家族の関係性を捉える際の指標となることが示唆された。多職種が連携するためのツールの一つとなる可能性が考えられる。また、見取り図で説明しきれないことは、写真や見取り図への書き込みによって補足され、より具体的な住まいや日常生活の把握へと繋がっていた。

今回の調査では、在宅の療養者支援に関わる職種という共通性はあったが、見取り図作成の目的が異なることから、あるいは目的が明確ではないことから、活用方法には大きな差異があった。しかしながら多様な活用方法が示されたことによって、今後見取り図を療養者支援に活かしていく可能性が示唆された。引き続き、見取り図を積極的に活用している介護支援専門員や訪問看護ステーション、地域包括支援センターなどへ見取り図活用目的の調査を継続し、療養者のアセスメントや連携の活用などへと繋げるための視点（項目）を集積していく必要がある。

〈調査2〉A地区における見取り図を活用した事例検討会の試みと見取り図作成に関する情報収集

事例検討会で見取り図を活用することで、住生活ニーズの具体的な把握と暮らし方の選択の確認が可能であることが明らかになった。これらのことは、今後のより適切なサービス提供や、住まいや暮らし方の選択に寄与するものであることが期待される。介護支援専門員をはじめとする在宅療養支援に関わる専門職が、見取り図を作成し事例検討会で活用することの効果については、今後さらに検証を重ねていく必要がある。

今回の調査は、離島という地域の、一つの法人の協力により実現したものである。得られた結果は、限定された地域の一例に過ぎない。今後、調査を重ねることにより事例検討会における見取り図活用の可能性について明らかにして行く必要がある。

また、実務に携わる専門職が事例検討会等で見取り図を活用することを想定すると、今後は見取り図の描き方についても検討していく必要がある。

<調査 3> 地域住民が見取り図を活用する有効性：介護予防教室参加者の見取り図活用

見取り図の作成には、高齢者が負担なく作成でき、家の構造やモノを意識し、さらに生活上の危険を認識するというプロセスがあった。描かれている情報から、将来、起こるであろうことを推察し身体の危険に関する意識づけの強化がされ、災害時や不測の事態への対応について検討された。そして、危険なモノを取り除くなど行動変容につながった。以上のことから、見取り図は、高齢者が住まい方の変更をする時に、納得し、自己決定できるツールとして活用できることが示唆された。

今後、さらに対象者の年齢層や健康障害の枠を広げて、地域住民が活用する見取り図の有効性と限界を検証していく必要がある。

<調査 4> 介護支援専門員研修における見取り図の活用

各都道府県の介護支援専門員実務研修で使用されているアセスメントシート方式によって、住宅の図面の記入欄のフォーマットは大きく異なっている。また講義・演習の中で住宅の図面について説明したり活用したりする状況にも濃淡がある。都道府県によっては、介護支援専門員が住宅図面の記入や活用について十分な知識や経験を習得できていない状況が懸念される。

平成 28 年度から新しい研修体系が始まっている。新しい研修体系では事例をとおして住環境に関するアセスメントが行われることになっているが、その方法論がまだ確立していない。これを機会に、介護支援専門員の専門性や資質の向上が全国的に等しく行われるように、アセスメントシート方式における住宅の図面の記入欄のフォーマットや、講義・演習における図面活用のあり方の見直しが必要である。その際、図面の活用の方策だけでなく、描き方に関する講義・演習についても合わせて検討することが求められる。

<調査 5> 見取り図活用効果を検証するための仮想事例検討会の試み

事例検討会における見取り図の活用効果は、以下の二つに集約された。

一つ目は、見取り図があることで、生活の場の全体像と動作環境の具体的状況に関する共有化が、より効率的かつ正確に行われて

いた。これらは参加者が対象者の生活をイメージすることを喚起し、当事者の存在を身近に感じることに影響していた。

二つ目として、見取り図のある事例検討会は、司会者の進行により、参加者の質問に提供者が応え整然と進むという形に収まらず、時に参加者同士の自由なやり取りが行われていた。そこでの議論は、しばしば事例提供者が想定した課題の枠組みを超えたものとなっていた。

以上のことが、詳細なアセスメントと具体的な支援策の提案に影響していると考えられる。今回、実験的に開催した事例検討会の参加者はいずれも経験豊かな専門職であり、限られた事例での検討会に過ぎない。見取り図の効果について、今後さらに検証を重ねていく必要がある。

<まとめ>

本研究では、見取り図を活用した在宅支援のアセスメントの実態把握あるいは試行をとおして、その効果を明らかにしながら、在宅支援者の見取り図活用による在宅ニーズの把握方法を検討しようとした。

見取り図を用いた事例検討会によって、在宅支援ニーズを明らかにしようとするフィールドワークを重ねてきた経験から、その効果を少し客観的に提示することによって、この方法が広く採用されるようにならないだろうか、といった動機がこの研究課題に取り組む出発点にあった。今回の調査でも確認されたが、現場では見取り図が積極的に活用される実態はあまりみられない。果たして今回の研究がそれを変える突破口となるかといえば、答えは否である。見取り図効果の客観的な評価については、残念ながら、今回も十分な検証がなされたとはいえないであろう。ただし、見取り図を自ら描きそれを用いた事例検討会によるニーズの検討といったプログラムに参加した人の多くが感じる「ダイナミズム」「おもしろさ」などが、どのような要因によってもたらされていたのか、その一端を確認することはできたように思われる。それら仮説をあらためて検証することは必要であろう。同時に、普及啓発のためのツール開発も取り組むべき課題であると認識している。科学的根拠の正確な提示と普及啓発は必ずしも直結するものでもなく、今回作成した描き方パンフレットも「もう一つの道」となることを期待したものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

工藤恵子 鈴木 晃 浦橋久美子 大越扶貴 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美・高齢者の在宅生活支援のためのニーズ把握：事例検討会における見取り図の活用．リハビリテーション連携科学、査読有 .2015 .Vol.16, No.2, pp.159-168 .  
鈴木 晃 工藤恵子 浦橋久美子 大越

扶貴 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美 . 在宅支援者のアセスメント・ツールとしての見取り図の有効性に関する検討 . リハビリテーション連携科学、査読有 . 2016 . Vol.17, No.1, pp.12-19 .

〔学会発表〕(計 16 件)

鈴木 晃 工藤恵子 大越扶貴 浦橋久美子 阪東美智子 川南公代 岩本里織 齋藤泰子 他、非言語情報媒体を活用した在宅ニーズの把握方法(1)「見取り図」に関する予備的検討 . 第 73 回日本公衆衛生学会総会、2014.11.7、栃木県総合文化センター(栃木県宇都宮市)

工藤恵子 鈴木 晃 大越扶貴 浦橋久美子 阪東美智子 川南公代 岩本里織 齋藤泰子 他、非言語情報媒体を活用した在宅ニーズの把握方法(2)課題あるいは結果としての住み方 . 第 73 回日本公衆衛生学会総会、2014.11.7、栃木県総合文化センター(栃木県宇都宮市)

工藤恵子 鈴木 晃 . 高齢者の在宅生活ニーズアセスメントにおける「見取り図」の活用 . 日本リハビリテーション連携科学学会第 16 回大会、2015.3.15、障害者スポーツ文化センター横浜ラポール(神奈川県横浜市)

鈴木 晃 . 学会企画セミナー：住環境整備に求められるリアル・ニーズへのアプローチ；多職種連携による自立した居住の支援のために . 日本リハビリテーション連携科学学会第 16 回大会、2015.3.15、障害者スポーツ文化センター横浜ラポール(神奈川県横浜市) 招致講演

高橋郁子 工藤恵子 鈴木 晃 浦橋久美子 大越扶貴 阪東美智子 猪股久美 網野寛子 . 在宅支援ニーズの多角的具体的把握方法 1：事例検討会における見取り図の活用 . 第 74 回日本公衆衛生学会総会、2015.11.4、長崎新聞文化ホール(長崎県長崎市)

鈴木 晃 工藤恵子 浦橋久美子 大越扶貴 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美 網野寛子 . 在宅支援ニーズの多角的具体的把握方法 2：継続的支援者による見取り図の活用 . 第 74 回日本公衆衛生学会総会、2015.11.4、長崎新聞文化ホール(長崎県長崎市)

工藤恵子 鈴木 晃 大越扶貴 浦橋久美子 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美 網野寛子 . 見取り図活用に関する事例調査 1 介護支援専門員による見取り図を用いた事例検討会 . 第 74 回日本公衆衛生学会総会、2015.11.4、長崎新聞文化ホール(長崎県長崎市)

浦橋久美子 工藤恵子 鈴木 晃 大越扶貴 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美、他 . 見取り図活用に関する事例調査

2 見取り図活用に関する事例間の比較 . 第 74 回日本公衆衛生学会総会、2015.11.4、長崎新聞文化ホール(長崎県長崎市)

大越扶貴 工藤恵子 鈴木 晃 浦橋久美子 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美 . 見取り図活用に関する事例調査 3 地域包括支援センターによる困難事例の見取り図 . 第 74 回日本公衆衛生学会総会、2015.11.4、長崎新聞文化ホール(長崎県長崎市)

Kudo Keiko, Suzuki Akira, Takahashi Ikuko, Inomata Kumi, Amino Hiroko, The Ways of Dwelling of Frail Elderly Resultsof Discussion Using "Floor Plan Sketches" The 3rd KORIA-JAPAN Joint Conference on Community Health Nursing, 2016.7.3, Bexco ( Busan Korea)

鈴木 晃 工藤恵子 大越扶貴 浦橋久美子 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美 網野寛子 川南公代 齋藤泰子 岩本里織 . 仮想事例検討会による見取り図活用の有無に関する比較検討(その 1)検討会の進行状況 . 第 75 回日本公衆衛生学会総会、2016.10.27、グランフロント大阪(大阪府大阪市)

高橋郁子 工藤恵子 鈴木 晃 大越扶貴 浦橋久美子 阪東美智子 猪股久美 網野寛子 川南公代 齋藤泰子 岩本里織 . 仮想事例検討会による見取り図活用の有無に関する比較検討(その 2)脳卒中の在宅事例 . 第 75 回日本公衆衛生学会総会、2016.10.27、グランフロント大阪(大阪府大阪市)

工藤恵子 鈴木 晃 大越扶貴 浦橋久美子 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美 網野寛子 川南公代 齋藤泰子 岩本里織 . 仮想事例検討会による見取り図活用の有無に関する比較検討(その 3)がんの在宅事例 . 第 75 回日本公衆衛生学会総会、2016.10.27、グランフロント大阪(大阪府大阪市)

大越扶貴 工藤恵子 鈴木 晃 浦橋久美子 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美 丹尾由紀子 . 介護支援専門員および地域包括支援センター専門職の見取り図作成目的と活用方法 . 第 75 回日本公衆衛生学会総会、2016.10.27、グランフロント大阪(大阪府大阪市)

浦橋久美子 工藤恵子 鈴木 晃 大越扶貴 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美 岩本絵己 向後妙子 . 介護予防教室の参加者が見取り図を活用する効果 . 第 75 回日本公衆衛生学会総会、2016.10.27、グランフロント大阪(大阪府大阪市)

工藤恵子 鈴木 晃 浦橋久美子 大越扶貴 阪東美智子 高橋郁子 猪股久美 網野寛子 . 多職種連携のための見取

り図を活用した事例検討会・日本リハビリテーション連携科学学会第18回大会、2017.3.18、筑波大学東京キャンパス(東京都文京区)

〔図書〕  
該当なし

〔産業財産権〕  
該当なし

〔その他〕(1件)  
普及啓発用パンフレット「生活アセスメントのための見取り図を描いてみよう！」2017.3月発行

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

工藤恵子 (KUDO, Keiko)  
帝京平成大学・ヒューマンケア学部・教授  
研究者番号：60453958

### (2) 研究分担者

鈴木 晃 (SUZUKI, Akira)  
日本大学・工学部・教授  
研究者番号：20187701

浦橋 久美子 (URAHASHI, Kumiko)  
三育学院大学・看護学部・教授  
研究者番号：70406015

大越 扶貴 (OKOSHI, Fuki)  
三重県立看護大学・看護学部・教授  
研究者番号：90352632

阪東 美智子 (BANDO, Michiko)  
国立保健医療科学院・生活環境研究部・  
上席主任研究官  
研究者番号：40344064

### (3) 連携研究者

高橋 郁子 (TAKAHASHI, Ikuko)  
帝京平成大学・ヒューマンケア学部・  
准教授  
研究者番号：40379946

猪股 久美 (INOMATA, Kumi)  
帝京平成大学・ヒューマンケア学部・  
准教授  
研究者番号：90464784

岩本 里織 (IWAMOTO, Saori)  
徳島大学大学院・医歯薬学研究部・教授  
研究者番号：20321276

川南 公代 (KAWAMINAMI, Kimiyo)  
武蔵野大学・看護学部・准教授

研究者番号：90735903

齋藤 泰子 (SAITO, Yasuko)  
武蔵野大学・看護学部・教授  
研究者番号：50248861

網野 寛子 (AMINO, Hiroko)  
帝京平成大学・ヒューマンケア学部・教授  
研究者番号：90581984